

保育における

「記録」について思うこと

佐木みどり

保育を振り返り考察し次の保育を考えること、共に生活している保育者・幼児とのかかわりを考えること、いずれもが、私にとって保育を研究することです。保育を研究するには「記録」は不可欠なものであるといえます。私は、今までビデオ記録を「記録」の中心に考えてきました。撮影方法は随分工夫していたつもりでした。例えば、子ども達がビデオ

カメラを意識しないように目に慣れさせたいと思いい、いつもビデオカメラを肩から下げ、子ども達が「見せて」といえば見せてやり、ファインダーを覗き込めば覗き込ませてやりました。撮影する場合は、カメラを胸の辺りに構え、視線は全体を見、誰を撮っているのか分からないようにしたり、「何を撮っているの？」と子ども達から尋ねられれば「み

んが楽しそうだから撮っているの。撮ってもいいかな？ 邪魔じゃない？」などと答えていました。十分気を使っているつもりでした。

しかし、ビデオ記録と「記録」そのものについて考えるきっかけとなることがあったのです。

昨年の十一月のことでした。Aちゃんのお母さんから電話がありました。Aちゃんがいじめられているというような内容でした。Aちゃんは、三年保育中の女の子です。Aちゃんはいつも一人で積み木遊びをしていて他の子ども達とあまりかかわっていないように担任保育者のW先生には思えていたようです。担任のW先生は、Aちゃんのそんな姿が気に入り、他児と楽しく遊べるようになるためにはどの様なかわりが必要なのだろうか、私に相談していました。そんなことで、私は、偶然にもAちゃんを対象児として観察をしていたのです。そして、こ

の日は、ちょうどW先生がバス当番のため私がクラスに入る予定になっていました。

Aちゃんのお母さんからの電話を切り、取りあえずAちゃんの様子を見ようと思いい保育室に行くことにしました。そして、ビデオカメラを手を取ろうとしましたが、ためらわれたのです。邪魔だと思つたのです。Aちゃんのお母さんにAちゃんをいじめていると名前を挙げられた子ども達やAちゃんと自然にかかわろうとした時に、子どもの動きに合わせて動けないのではないだろうか、ビデオカメラはからの動きを制限し、自然な動きを邪魔するのではないだろうかと思えました。そして、からだの動きが制限されると直感的に動く軟らかい心になれないように思つたのです。

とにかく、その時は（今は邪魔）と感じ、カメラは持つていかないことにしました。

そして、W先生がバスから帰ってきてからもカメラを持たずに、降園まで一緒に保育をしていたのです。

子ども達の降園後、記録を書いていて今までの記録と違うことに気が付き（あれっ これはなんだろう）と記録を書く手が止まりました。今までも、ビデオ記録後のフィールドノーツを書いていたのでいつもと同じはずです。しかし、その日のように保育者や子ども達とやりとりしながら、一日過ごしたそのことを思い起こしながら書いた記録は何か違ったのです。

思い当たる何かをいろいろと考えてみました。そういえば、保育室に行くときビデオが（今は邪魔）と感じカメラを持たないで保育室に行ったことを思い出したのです。なぜ、あの時（今は邪魔）と感じたのでしょうか。そして、からの動きが制限され

ると思ったことや軟らかい心になれないと思ったことも思い出しました。なぜからの動きが制限されることか（今は邪魔）となったのでしょうか。柔らかい心になれないことは困るのでしょうか。そのことを書き上げた自分の記録を読んでいて気が付きました。ビデオカメラを持って保育をすることは、私とその場の中に溶け込みながら、子ども達や保育者とやりとりができないということにつながったのです。保育者や子どもの動きに合わせながらからの動きを動かさないと自然なやりとりができないのです。

その日の記録の内容は保育者やAちゃんとのやりとりが中心となっていました。

場面1

『保育中にAちゃんの上靴の紐がとれていたの
「Aちゃん、紐がとれているよ。チョウチョ結びに
しようか?」と言いながらAちゃんの前にしゃがん

で結び始めようとすると、Aちゃんが私の手を払いのけて自分で結び始めた。』

この場面を思い起こした時、Aちゃんのきつぱりとした手の動きや、ぬくもりが蘇りました。その払いのけ方は、「余分ナコトヲシナイデ」というものではなく、「自分で出来ルカラ見テテ」という意味合いであったのがやりとりをしていた私には伝わったのです。そして、一見おとなしくひ弱な感じのAちゃんですが、自分の意思をはっきり伝えることができるのだと実感しました。この出来事はビデオカメラを持っていたなら起こらなかったでしょうし、Aちゃんが思いをはっきり表すということもまだ気が付かずにはいたかもしれないのです。

場面 2

『a. W先生がバスから帰ってきて「ただいま」と言いながら後ろの扉から入ってくるとAちゃんは

サッと振り向き表情が明るくなった。クラスの他の子ども達もW先生の方を見た。「お帰り」という子、顔を向けるだけで遊びを続ける子など様々である。W先生が私の方に視線を向けたのであいさつをし、テラスの方に目で誘った。そして、今日の電話（Aちゃんのお母さんからの）をあらまし説明すると、すぐに二人で保育を再開した。私は保育室の中に入り、Aちゃんの近くにいる基地づくりをしている子ども達の手伝いを始める。W先生は子ども達の



遊びの様子を見ながらを保育室の中を一巡している。そして、

b. 一人ひとりに声をかけながら私にゆっくりと視線を向けると保育室を出て行った。W先生は外の子ども達を見に行くのだと思いながら、私はT夫達と積み木で基地づくりを再び始めた。』

傍線 a の部分は、ビデオカメラでも捉えられる場面です。しかし、傍線 b の部分はW先生とやりとりをしていないと感じられない場面ではないでしょうか。例えば第三者がビデオ撮影をしていて、W先生が保育室を出ていった場面が写っていたとします。

そして、後でビデオを視聴したとしても、その場面を見ただけでW先生が園庭に子どもの様子を見に行ったことが感じ取れるとは限らないのです。しかし、その場でW先生とやりとりをしていた私には、W先生が私を見ているのが感じられ、そして、園庭にいる子ども達の様子を見に（「外に行くから」と

いうW先生の「声」が聞こえたのです。

このようなことを感じてしばらくしてから、偶然にも愛育養護学校の西原先生の論文注を読む機会がありました。その論文には、ビデオカメラを回している時とそうでない時の感覚の違いが書いてありました。（同じことを感じてみえる）と心を強くしました。実践者は子どものぬくもりを知っている。そのかわりの中で子どもを観ているのだと。

私はこの感覚を忘れたくないと思いました。

しかし、勘違いをしないで欲しいと思います。このことは決してビデオ記録を否定したわけではありません。人間の記憶はいかにも思い込みがあり曖昧な部分があります。AちゃんとYちゃんが、W先生に「あやとり」を教えてもらって二人で始めたことが、W先生がやり方を先に教えたのはどちらだった

かな? などと思い起こす時、本当はY子ちゃんであつたのが私の記憶ではAちゃんだったなどということがあるのです。こんな時は、ビデオは役に立ちます。また、園内のケースカンファレンスで共通の話題を提供し、ひとりの子どもことをみんなで考えるにはビデオ記録は大いに役立ちます。

いづれにしても、日々生活をしていて感じていることを具体的な形で表現するのは難しいことだと思えます。そして、どの様な方法をとって「記録」しても、どこか言い足りなかったり、十分ではないと思ってしまうです。私の知っているAちゃんやW先生のこと、微妙な様々な事象を紡ぎだしつつあつたその場の様子を語りきることは出来ないのです。しかし、「記録」をとることの必要性がAちゃんの記録をとった時にあらためて感じられたのです。Aちゃんの「記録」を書いたことで、今まで見えな

かった、見ようとしなかったAちゃんとW先生の姿、記録の方法や書き方などの事柄が、書くという行為(撮るといふ行為)、読み直す(見直す)という作業を通して少しずつ見えてきたのです。ビデオ「記録」も保育後書く「記録」もそれぞれを有意味に働かせることもできません。

(岐阜県揖斐幼稚園)

注

西原彰宏 『実践の場の研究者の立場からのコミュニケーション障害の考察』コミュニケーション障害児の診断と教育に関する研究―子ども―教師の力動的関係―

―P118～120国立特殊教育総合研究所 一九九二